

## 第50回日本化学療法学会総会特別記念特集号発刊にあたって

井上松久

社団法人日本化学療法学会理事長



2002年5月、本学会が社団法人となつてはじめての総会として第50回日本化学療法学会総会および総会50回記念特別企画が総会長 守殿貞夫（西日本支部長、神戸大学大学院教授）理事によって盛大に開催されました。守殿会長、総会事務局を担当された荒川創一先生、記念誌発刊に向けて尽力された学会誌担当 猪狩 淳（順天堂大学教授）理事、本誌編集委員長 柴 孝也（東京慈恵会医科大学教授）監事、編集委員各位ならぶに学会事務局に対して会員一同、心から御礼申し上げます。今般、第50回総会終了時より熊澤浄一前理事長からその大役を引き受けることになりました。よろしくお願い申し上げます。ご存知のごとく本学会は、定款のなかで「化学療法に関する学理及びその応用についての研究発表、知識の交換、会員相互及び内外の関連学会との連携協力等を行うことにより、化学療法の進歩普及を図り、もって我が国の学術に寄与することを目的とする」ことを掲げております。理事会は、今回の特別企画のなかで多くの先生方からいただいた多数の貴重な提言や課題について議論し、その実現に努力する所存です。

さて、21世紀の初頭の昨年に明らかにされたヒトゲノムの粗稿の結果は、医療現場に多大の期待をもたらしています。しかし、ヒトゲノム遺伝子数が予想以上に少なかったことは、一方でヒトゲノムの遺伝子調節・発現がどのように相互にかかわり個体という複雑系を構築し、それに生活環境などの変化がいかなる影響を与えるのかなどについても少しずつ解明されるものと期待されます。その他、高齢者に見られる疾病—多因子疾患—の原因を究明が、一塩基多型と疾患とのかかわりについてのデータの蓄積によって進展するでしょう。さらに、ヒトゲノム解析の結果から人類誕生以来細菌やウイルスとの戦いが繰り返されてきた痕跡も見つかり、今後も感染症の脅威は、いささかも変わらないため、感染症の起因微生物の迅速診断技術がますます進展し、化学療法薬が標的とする起因微生物や宿主細胞・組織の状態も現在よりも格

段に明確になるはずで、それに伴って宿主の免疫力の低下した易感染患者それぞれに対する最適な医療、いわゆるテーラード・メデイシンや耐性菌出現の要因となる慢性疾患に対する抗菌薬療法の改善も飛躍的に進む期待が挙げられます。かかる時代に対応するために、本学会としても耐性菌の疫学情報科学、化学療法薬に関するPK/PD、動物感染モデルの応用、あるいは感染時における細胞性免疫や高齢者の宿主免疫反応などの領域に精通した人材を会員として広く募り、化学療法をより総合的な観点から捉えた基礎・臨床応用などの学術研究を推進させる必要があります。

ところで、本学会をはじめ、関連学会が中心となって抗菌薬使用のためのガイドラインも作成されてきています。これとは別に、本学会は抗菌薬臨床試験指導者制度によって抗菌薬の専門家の育成に取り組んでいますが、この活用も学会としての大きな課題のひとつです。現在問題となっている市中感染や院内感染による耐性菌は特殊な医療現場から日常生活環境へと拡大し、両者の区別はできない状況下にあります。そこで本学会として耐性菌問題の解決に取り組むため、それぞれの地方の医師会と協力し、抗菌薬臨床試験指導者制度を地域医療現場に拡げ、ガイドラインの徹底とあわせて抗菌薬の適正使用に正面から取り組むこともひとつの方策と考えます。その波及効果として、学会と地域医療現場との融合や抗菌薬の臨床評価が広い領域で実施され、その質的レベルの向上も期待されます。

いずれにしても、化学療法に関する分野の学術集団である本学会としては、会員の意見を十分吸収し、その上で国民の健康と疾病の予防に関して常に社会的情勢やその要求に応えるために、多くの情報を提供する責任があります。理事会では、会員の意見を広く吸収し、それを実現させるために学術担当理事および将来計画委員会などを設け検討することとしました。会員各位の忌憚のないご意見をお寄せください。